

## 自由と愛国

－ 18 世紀後期のドイツ語圏におけるパトリオティズムの展開 －

菅 利 恵

**要旨：**18 世紀のドイツ語圏において、愛国的な言説が強化されたのはプロイセンがヨーロッパ諸国と戦った七年戦争（1756-1763）がきっかけであったとされる。それから約 30 年前後、つまりナポレオン戦争とともに国民意識が明確に形を結び始めるまでの過渡的な期間は、おもに通俗哲学や文学を媒体に、新しい愛国の観念を意識化し言語化する試みが徐々に活発化した時代であった。従来の研究において、この時期の愛国の言説に対しては「自由主義的で非政治的」という評価が再三下されている。本稿はそのような評価を再検討しつつ、当時のパトリオティズムの特徴を明らかにしようとするものである。啓蒙時代の愛国をめぐる言説の政治性を確認しながら、自由主義的なものがどのようにあらわれていたのかを示し、さらに、そこに潜んでいた問題性について考察する。

まず、18 世紀後半の愛国的な言説の基盤を見るために、雑誌や各種の協会活動を母体とする当時の市民的な公共圏の発展に注目し、そこに展開した言説の政治的な意義を押さえる。その上で、過渡的なパトリオティズムを代表するものとして、トマス・アプトの愛国的論説と、ゲッティンゲンに活動拠点を置く文芸サークル「ゲッティンゲン・ハイン同盟」で紡がれた愛国的な詩、また C. F. D. シューバルトやヘルダーの愛国的な言説に光を当てる。それらの言説が、さまざまな形で「自由」への希求を表現していたことを具体的に見た上で、それらに表現された「自由」の観念に潜む問題性を明らかにする。

### はじめに

無数の領邦に分かれ国民国家の基盤が固まらなかった 18 世紀のドイツ語圏において、愛国的な言説が強化されたのは、プロイセンがヨーロッパ諸国と戦った七年戦争（1756-1763）がきっかけであったとされる。それから約 30 年前後、つまりナポレオン戦争とともに国民意識が明確に形を結び始めるまでの過渡的な期間は、通俗哲学や文学を媒体に、新しい愛国の観念を言語化する試みが徐々に活発化した時代であった。ナショナリズムの世紀が幕を開ける直前に展開したこのパトリオティズムの特徴について、マイネッケは 1928 年に出された『世界市民主義と国民国家』の中で、理想主義的、普遍主義的な傾向がきわめて強く、もっぱら非政治的な文化現象であったことを指摘している。<sup>1</sup> それ以降も当時の愛国はしばしば文化的な営みとしてとらえられ、啓蒙主義的な自由と人間性の理想に忠実であったことが強調されてきた。本質的に自由主義的であったがゆえに、それは国家の排外的な自己主張として展開する 19 世紀以降のナショナリズムとは異なっていたとも言われている。<sup>2</sup> 近年ではバーニングやブリグニッツの研究が当時パトリオティズムを自由主義的なものと見なし、<sup>3</sup> これを「改革主義的愛国主義 Reformpatriotismus」と呼ぶとともに、<sup>4</sup> 19 世紀以降のナショナリズムとの違いを強調した。<sup>5</sup> 歴史家のダンも、過渡的な愛国運動の政治的な内実を認めつつ、その特徴をやはり

「自由の意識」<sup>6</sup>に見出して「平和主義的で文化的」<sup>7</sup>な愛国という評価を堅持している。

その一方で、このように過渡期のパトリオティズムを非政治的で自由主義的なものと見なす傾向に対しては、すでにブリッツやヘルマンらによって異議が出されてもいる。彼らは、18世紀の愛国も自国中心的な排外主義と無縁ではなかったことを詳細に示し、もっぱら自由主義的な面に光を当てた従来の研究の偏りを批判したのだった。<sup>8</sup>

こうした研究状況をふまえながら当時のパトリオティズムの特徴をあらためてとらえようとするとき、重要と思われるのは、近代における愛国的な現象を、自由主義的もしくは排外的と、どちらか一方の側面のみにおいてとらえることはできない、ということである。近年のナショナリズム研究においては、近代的なナショナリズムの影響力の源が自由主義との親近性に見出されるとともに、それが逆説的に排外的な側面そのものを誘発する構造を持つことも指摘されており、「自由主義的な」顔と「排外主義的な」顔の峻別自体に無理があることが明らかにされている。<sup>9</sup> 後で見るように、1770年代前後の愛国も決してただ「自由主義的」なものとしてのみ存在していたわけではないし、また逆に、その排外的な側面が明らかにされたからといって「自由主義的な」側面がなかったことにはならない。当時の実相を知ろうとするならば、二つの側面のせめぎあいや、両者の併存を許した構造を探る必要があると思われる。

以下の論考は、18世紀後期におけるパトリオティズムについて、「自由主義的で非政治的」というこれまでの評価を再検討するものである。そこで自由主義的なものや政治的なものは、具体的にどのようにあらわれていたのだろうか。またそこに潜む問題性とは、すでに指摘されてきたような、排外主義との結びつきのみだったのだろうか。

### 1) 「文芸的公共圏」と政治的な自意識形成

ドイツ語圏の18世紀において、市民知識層の政治的な力はきわめて弱かったといわれる。封建的な体制が色濃く残る中、市民知識層の経済的な力はまだ弱く、議会制や官僚機構を通して政治の直接的な担い手になる回路もまだ確立されていなかった。ただ、だからといって彼らが非政治的な存在であったわけでは決していない。公的な場面に主体的に参加する道はさまざまなかたちで模索されていた。

ひとつの重要な足場となったのは、各種の協会や結社などの文化的な集まりである。この時代の知識層は、知的な関心を入り口にして人とのつながりを広げ、これを組織化し発信することに熱心であった。17世紀以降、学問的または文学的な興味を共有する人々が集う協会が各地に広まる。大学を拠点とした学生と学者の集いに端を発するこの種の協会は、定期的に会合をもうけて一定のルールを共有するとともに、会員のための行事のみではなく、広く公衆に向けた催しや講演の拠点ともなって、18世紀を通して知的な言論活動の場として大いに発展した。<sup>10</sup>

文化的な関心に基づいた各種協会の活動には、定期的な会報などの出版活動がともなっており、しばしば協会を母体とする知識人向けの雑誌が刊行されている。そうした雑誌をはじめとして、18世紀においては、学識や洞察を広めるための定期刊行物が流行した。道徳週刊誌や文芸誌や新聞が次々と発行され、<sup>11</sup> 書籍の刊行も急速に増加し、出版文化全体が顕著な発展を見せたのである。

まだ直接的な政治参加の術を持たない市民知識層にとっては、このような各種の協会活動や出版物こそが、自らの社会的な存在観を高めるための格好の足がかりであった。<sup>12</sup> 「文芸的公

共圏」(ハーバーマス)と呼ばれるこの言説形成の拠点は、当初、時事問題や政治よりももっぱら道徳や言語、神学を中心とする諸学問への関心によって成り立っていたとされる。協会や雑誌の名に「愛国的 patriotisch」との言葉が冠されていても、国への愛を強調する言説が展開したわけではなく、この言葉によって表現されたのは、市民としての道徳的なあり方に自覚的な姿勢ということであった。<sup>13</sup> マルテンスの研究によれば、18世紀前半に流行した道徳週刊誌においても政治的な主題は基本的に避けられていたという。<sup>14</sup> それでも、道徳や社会についての考察や文学表現が王侯の徳や徳のある政治というテーマに及ぶことがあったように、<sup>15</sup> 道徳論や文芸を通じた自己表現は、政治的な諸問題との取り組みにつながる回路を確実に宿していた。18世紀後半になると、シュバルト Christian Friedrich Daniel Schubart の『ドイツ年代記 Deutsche Chronik』(1774-1778)のように、政治的な主張をより明確に込めた雑誌もあらわれる。詩や劇作品や書評などを中心に載せる文芸誌の中にも、社会問題や時事的なテーマが多く織り込まれるようになった。<sup>16</sup> つまり市民的な公共圏において政治的な側面が強められ、人々の政治的なアイデンティティをどのように形成するのか、という問いが明確に追求され始めたのである。文芸評論と並べて海外事情や政治的論考を載せた定期刊行物は、読者に時事問題についての知識を共有させ、政治的な見解を醸成して、市民知識層の政治的な自意識形成を後押しすることになった。

この時期の「文芸的公共圏」に特徴的だったのは、国の枠組みを超えて人間性を追求するコスモポリタニズムが大きな影響力を持ったことである。そもそも、ドイツ語圏が無数の領邦に区切られた状況にあって、社会的なものにコミットしようとする人々がイメージした社会的全体性の具体像は決して一様ではなかった。それは生まれ育った郷土こともあればより大きな枠組みとしての「帝国」のこともあり、またそれらの境界線とは無関係に存在する文化的、言語的共同体としての「ドイツ」のことも、さらにはいかなる境界線も前提としない「世界」ということもあったのである。<sup>17</sup> その中でも「世界」を念頭に置いて道徳性を押し広げようとするコスモポリタニズムは、普遍的な「人間」の観念を基盤にした啓蒙主義的な思考とよく共鳴した。レッシング Gotthold Ephraim Lessing をはじめ多くの市民知識層にとって、それはパトリオティズムよりも強い説得力を持ったのである。<sup>18</sup>

そのようにコスモポリタニズムの影響力が強い中でも、18世紀半ばを過ぎると「祖国 Vaterland」の重みが徐々に拡大し、「ドイツ Deutschland」の枠組みや「ドイツ的 deutsch」であることの意味も問われるようになってくる。次節ではその展開を、祖国の愛されるべき価値がどこに見出されたのか、という点に注目しながら概観したい。

## 2) 18世紀後半における愛国の言説の発展

1761年にトマス・アプト Thomas Abbt が発表した『祖国のための死について』は、当時の市民的なパトリオティズムを表現した最も有名なひとつである。アプトはベルリンなどで哲学や数学の教授をつとめられたが、歴史や道徳についての著作を執筆し、若くして才能のある知識人として認められていた。同時代のさまざまな知識人たちが人間の使命や道徳性について語る中、アプトに特徴的だったのは、彼がこの「使命」を徹底的に社会的なものとしてとらえたことである。彼は、道徳について語るならば人間としてだけではなく市民としてのあり方を考えなければならないとし、「政治的な徳」の向上を追求して、公共の善のために自覚的な姿勢としてのパトリオティズムを奨励した。<sup>19</sup> 『祖国のための死について』は、この考えを最も

明確に打ち出し、人々を「気高い愛国心で満たし」「我らが勇敢なる男たちの群れに引き込む」ことを目指すとともに、市民の政治的な自意識を鼓舞するために必要な社会条件について論じたものである。<sup>20</sup> アプトはここで、国が人民のものである共和国においてしか愛国心は成り立たないという考えに反論し、国が君主のものである君主制のもとでも、人民の愛国心は十分可能だと主張する。その主張は君主制を擁護する点で保守的ではあったが、同時に、個々人の自由を掲げる自由主義的な方向性に強く刻印されてもいた。アプトにおける愛国とは、旧来の封建社会における愛国とは異なり、単なる君主への忠誠心ではなく、公共圏への主体的なコミットメントとしてとらえられている。<sup>21</sup> そのような主体的な祖国愛は、彼によれば、ただその国で生まれ育ったというだけでは生まれない。自己犠牲的な愛に値する祖国とは、個人の自由を最大限に保証し、個々人がその体制に心から従うことができるような政治機構のことである。彼は言う。

祖国とはいったい何であろうか。この言葉が意味しうるのは必ずしも生まれた土地ばかりではない。自らの生まれにより、または自由な決断により国家と結ばれ、その有益な法、すなわち全体の最善のために必要なとき以外は私から自由を奪うことのないような法に従うとき、私はこの国家を祖国と呼ぶのである。<sup>22</sup>

このように彼は自由の擁護こそを愛に値する祖国の条件ととらえて、次のように明言した。「祖国の声は、自由の空気が失われたところではもはや響かない。」<sup>23</sup> ここでは祖国愛の条件に「自由」が掲げられることによって、祖国への思いが、「自由」への思いにそのまま重ねられている。<sup>24</sup>

自由への希求の受け皿であり、培養土であり、だからこそ価値を持つものとしての祖国の観念は、文学の領域でも打ち出された。先に見たように、当時は各種の文学的、学問的な協会が社会と能動的に関わる主体を育む土壌になっていたが、その典型的なひとつに、ゲッティンゲンで1772年秋に発足したハイン（森林）同盟という文芸サークルがある。これは詩人クロップシュトック Friedrich Gottlieb Klopstock に心酔する若い学生詩人たちの集まりで、ゲッティンゲンの『ドイツ語協会』やライプツィヒの『ブレーメン寄与』など既存の協会のスタイルを踏襲して組織されており、そのメンバーは毎週土曜日の午後定期的に会合を開いては、自作の詩を読み上げ批評し合っていた。<sup>25</sup> そこで1773年以降、クロップシュトックの強い影響のもとに、愛国的な言葉が盛んに紡がれたのである。<sup>26</sup> 郷土の自然や生活に根ざした詩を多く書いたミラー Johann Martin Miller は、『愛国者から祖国へ』（1773）の中で「祖国」を次のように思い描いている。

祖国よ甘きその響きよ。  
絆の堅い和が  
市民の心を結ぶところ。  
自ら血を流しても  
盗人の手から  
隣人の財を喜んで守るところ。

正義の玉座に立ち  
助けを乞う哀れな者を  
抑圧から守るところ。<sup>27</sup>

これに続く部分では、祖国が宗教的な純粹さと道徳性の場所として歌い上げられる。「真のドイツ人とは いつも善きキリスト教徒なり」<sup>28</sup>とも歌っているように、彼は「ドイツ的」ということをなによりも道徳性や宗教性に重ねた。<sup>29</sup>同時に、市民が力を合わせて他からの侵略に打ち勝つイメージや、不当な抑圧を排除するというイメージに見て取れるように、ここでは宗教的な倫理や道徳が、「自由」の観念と直接的に結びつけられている。『ドイツの若者、われに向けて』(1773)という詩の中で、彼は「ドイツ的であれ、我が心よ！—おお祖国よ」と熱狂的に吐露するとともに、「自由」への思いをより明確に打ち出した。

奮起せよ、我が心よ自由になれ！  
ドイツの首筋を汚す  
奴隷のくびきを粉碎せよ！<sup>30</sup>

このように守るべき道徳性を「祖国」に重ね、祖国の「自由」をうたう言葉には、自由こそを道徳的な状態ととらえてこれを希求する思考回路が明確に表現されている。ハイン同盟の中心人物であったフォス Johann Heinrich Voß もその詩『ドイツ』(1772)において、「自由は暴君に踏みつけられ死に追いやられた」<sup>31</sup>と嘆き、「奴隷の鎖」や「暴君」に対する激しい呪詛の言葉を織り交ぜながら自由への思いを歌った。さらに、ハイン同盟で例外的に貴族であったシュトルベルク Friedrich Leopold Graf zu Stolberg は、とりわけ熱狂的かつ好戦的な口調で自由への思いを表現している。

自由よ！佞臣どもはこの思想を知らぬ  
奴隷どもよ、奴らめには鎖の音も鈴の音にしか聞こえぬ  
膝を折り、魂を折り  
くびきにその臆病な首を差し出す

我にすればそは崇高にしておののきを呼ぶ  
歓喜の思想。自由よ！我はおんみを感じる  
おんみは我が心を満たし  
思いとともに溢れ出す<sup>32</sup>

シュトルベルクは「自由の剣のみが祖国のための剣」<sup>33</sup>として祖国に自由の観念をそのまま重ね、この自由の観念ごと、祖国を憧憬の対象としたのだった。

ミラーやフォス、シュトルベルクなどの若い詩人たちが一様に祖国の「道徳性」を讃えているように、詩人たちにとって祖国の愛すべき価値とはなによりもその道徳性であり、「自由」もまたこの道徳性の重要な構成要素としてとらえられていた。こうしてドイツの習俗を「道徳的」と賛美するまなざしは、ドイツの文化そのものを讃える姿勢とも結びついている。すなわ

ち愛国の詩人たちは、祖国の「道徳性」のみではなく、その歴史や偉大な英雄、そして言語といった文化的な資源を、固有の魅力として強調したのだった。クロップシュトックの『我が祖国』（1768）では、祖国の愛すべき美質として、高い道徳性や精神性と並べて「力強い」言葉が挙げられている。

おんみは質朴なしきたりを守り 賢明で  
心は真摯に深く 言葉は力強い。  
剣は決然としているが おんみは喜んでこれを鎌に持ち替えるので  
幸いなるかな！おんみは他の国の血に濡れてはいない！<sup>34</sup>

クロップシュトックはこのように祖国の道徳的な価値を歌うとともに、そうした価値を人々に伝え広める詩人を、文化的な共同体を成立させるための中心的な立役者としてほとんど神聖視した。<sup>35</sup> 彼は 1774 年に、自らの考えを『ドイツの知識人共和国』という構想において結実させている。<sup>36</sup> それは選ばれし詩人たちが牽引してドイツ文化を開花させ、それによって新たな共和国を生み出そうとするものであった。彼は、彼を慕うハイン同盟の若者たちを、自身の構想を実現させるための足がかりととらえて、その活躍に期待を寄せたのである。<sup>37</sup>

このようにクロップシュトックとその信奉者が「祖国」の愛すべき価値を歴史や言葉に見出し、この価値をうたい上げて祖国愛をうながす文化人の役割を重視したのに対して、知識人のみではなく「民衆」にも目を向け、その言葉や歌に注目したのがヘルダー Johann Gottfried von Herder である。クロップシュトックの「知識人共和国」の構想が、もっぱら知的な文学活動をドイツ再生の基礎にしようとしたのに対して、ヘルダーは、民衆（Volk）の紡ぐ言葉に目を向けた。1774 年に書かれた『民謡集』序文の中で彼は、教養ある人々ではなく一般の民衆こそが文化の担い手であることを強調し、彼らを「嫌悪して」「民衆を知らないまま部屋に引きこもっている学者」を強く批判している。<sup>38</sup> そしてフランスに学ぶことにばかり熱心で自国の言葉や文化をかえりみない従来の風潮を「教養にあふれた我らがドイツ」<sup>39</sup> と皮肉り、彼らが軽視してきた民衆の言葉こそが「国民の身体」<sup>40</sup> であるとして、これを祖国の愛されるべき価値として主張したのだった。

以上概観したように、18 世紀後半における愛国の言説の中では、祖国がなによりも「自由」と「道徳」、そして「文化」の拠点としてとらえられており、それらが祖国を愛する理由であった。愛されるべき「ドイツ」とは、ドイツ語とドイツ語でつむがれる文芸作品、「ドイツ的」な道徳性、そして偉大な英雄を排出して来たその歴史であり、その理想主義的で文芸的な祖国ドイツに、自由の観念もまた投影されていたのだった。自由な祖国のみを愛国の対象としたアプトにとって、「祖国」とは実際に存在するものというよりもむしろその実現のために励まねばならない未来のものである。<sup>41</sup> ハイン同盟の詩人たちが歌った「祖国」も、過去や現在に確かな実体を持つというよりは、詩的な言葉で創作されたものであり、宗教的、道徳的な情熱と自意識を受けとめるための器であった。つまりこの時期の愛国の言説における祖国ドイツとは、きわめて観念的なものだったのである。<sup>42</sup>

序でふれたようにマイネッケは、そのように観念的で文芸に多くを負った愛国の言説を「文化ナショナリズム」としてその非政治性を強調した。しかし、この「文化ナショナリズム」は

たしかに観念的であっても、だからといって「非政治的」と言い切ることはできないだろう。繰り返し述べて来たように、市民知識層にとって直接的な政治参加の道が限られていたこの時代においては、文学も含めた文筆活動にこそ、よりよい政治や新しい共同体のあり方への模索が込められていたのである。クロップシュトックの「ドイツの知識人共和国」構想やヘルダーの『民謡集』の試みも、ドイツの文化を新しく活性化させることを願い、文学を通して新しい全体性を立ち上げようとするものであり、諸邦に分裂した現状に対する批判意識に裏打ちされている。ドイツの文化を神聖なものとして歌い上げた詩作品は、ただ非政治的な熱狂の表現ではなく、社会的現実に関与しようとする具体的な模索の表現であり、国民的な自意識の下地を確かに作るものであった。「文化」や「自由」の観念を核とした観念的な愛国もまた、公共的、共同体的な事柄への主体的なコミットメント—それこそがギリシア語の *politikos* に由来する「政治 *Politik*」の元来の意味である—の一形態という点においては、やはり「政治的」だったのである。

### 3) 愛国の言説における排外的な側面

上に見たように、18世紀後半において「祖国」は自由の観念と強く結びつけられていた。その一方で、序でふれたように、これまでの研究においては、この時期のパトリオティズムの問題性も指摘されている。コーンやブリグニッツが、当時の愛国の言説を自由主義的で道徳的なものとして強調し、排外的で攻撃的な19世紀以降のナショナリズムとは異なっていたととらえているのに対して、ブリッツやヘルマンは、ゲッティンゲンの詩人を中心にしきわめて排外的な自国中心主義が存在したことを明らかにした。<sup>43</sup>

実際ハイン同盟の詩人たちは、シュトルベルクをはじめしばしばナイーブなまでにドイツへの愛に陶酔しており、他文化からの影響にことさら反発したり、ドイツ的なものの素晴らしさを浮かび上がらせるために他文化をおとしめることもあった。その対象はもっぱらフランスである。<sup>44</sup> そうした排外的な攻撃性を考えるならば、この時期のパトリオティズムをたんに自由主義的で道徳的なものとしてのみとらえることはたしかに誤っている。

ただ、見落すことができないのは、この時代の愛国の言説が、それ自身のうちに排外的な傾向に対抗する方向性を内包させていたという事実である。自由や人間性を核に置いた啓蒙主義的な理想主義と、偏狭な排外主義は本来対立的なものであろうが、この時代のパトリオティズムの言説においても、この対立が放置されていたわけではなかった。

愛国を歌った詩人たちの自由への思いが、彼らをとらえていた排外主義にしばしば勝るものであったことは、フランス革命への反応に明らかになっている。ドイツ宮廷のフランスびいきに憤り、ドイツは「公平すぎる」あまりフランス文化を過大評価していると批判したクロップシュトックも、<sup>45</sup> フランス革命を迎えると次のように歌ってフランスを讃えた。「フランスは自ら自由を生み出した。最も気高い世紀の事業は かの地ではオリュンポスの高みに到達した！」<sup>46</sup> また雑誌『ドイツ年代記』(1774-1778)で人気を博し、「自由への渴望と祖国愛に満ちた」<sup>47</sup> 詩人を自負するシューバルトも、フランス革命を自由の勝利として熱く歓迎し、次のように言っている。「私は常ならばフランス人に対する憤慨を同胞と共にしていた。(・・・)しかし今はフランスの守護神の手に口づけしよう。それは自由の精神なのだから。」<sup>48</sup>

愛国者自身、しばしば愛国の姿勢が持ちうる偏狭な自国中心主義を乗り越えようと試みている。<sup>49</sup> ハイン同盟の詩人を精神的、経済的に援助したボイエ Heinrich Christian Boie による

『新ドイツ博物館』（1789-1791）は、基本的には愛国的な立場を打ち出した雑誌であり、1790年号にも、ドイツ人としての誇りを喚起することを目的とした、それ自体はきわめて愛国的な記事が載せられている。<sup>50</sup> だが注目に値するのはその語り口である。記事によれば、これまで多くの詩人がドイツ人の誇りを高めるために「思い上がった周辺国と競り合い打ち勝つよう鼓舞」して来たという。しかしこの筆者は、そのような「詩人」ではなく「哲学者」として語りたいたいという。すなわち、「民族についてのあらゆる偏見を取り去った」うえで、「さまざまな民族を評価し、その優越性を見定め」たいというのである。<sup>51</sup> しかしそれには困難がある。なぜなら「ドイツの誇り」を他の文化に対する優越性から説こうとしても、文化の優劣を決めるのは簡単ではないからである。「優越性を定めようとしても、まったく多様な観点がある。高度な道徳性で判断するのか、それとも社会文化の拡張性か。」<sup>52</sup> この論者は、そうした困難を自覚するがゆえに、ドイツの価値を他国に対する優越性に求めることをやめて、単純に次のように問うことにする。すなわち、「ドイツ人に、自らの民族について誇りうるものはあるか」<sup>53</sup> と。そしてこの「誇りうるもの」の具体例として、印刷技術や優れた作家などの文化的功績を次々に挙げてゆくのである。

この記事においては、独善的になることを可能な限り避けながら国への愛を語ろうとする意識が明確にあらわれている。そのような言説は、公平さや偏見の排除といった啓蒙主義の理念が、同じ啓蒙主義に足場を持った愛国者に、自身の言説を反省的にとらえ、そのふるまいを修正するような参照原理として機能していたことを明らかにしている。つまり18世紀後半のパトリオティズムにおいては、啓蒙の原理そのものが、偏狭な自国民中心主義に歯止めをかけてもいたのだった。<sup>54</sup> 啓蒙主義の原理と深く結びついていた点で、この時代のパトリオティズムはコスモポリタニズムとも明確な親近性を持っていたのである。<sup>55</sup>

#### 4) 「自由主義的」なパトリオティズムの問題性

上で見たように、18世紀の愛国は排外的な側面を確かに孕みながらも、啓蒙の精神からこれを自制することの重要性も自覚されていた。

しかし、当時のパトリオティズムの問題性は、時折見られた偏狭な自国中心主義のみではなかったようにも思われる。

ハイン同盟の詩人たちについて詳しい研究書を出したケンパーは、彼らが歌った「自由」の観念の曖昧さを指摘している。<sup>56</sup> 先に述べたように、愛国の詩人たちは「暴君」や「奴隷」状態を激しく糾弾したが、その際に拒絶の対象になる「暴君」とは他の文化圏（おもにフランス）の脅威や、フランス文化を偏重する世の風潮、また道徳的生活を脅かすような悪徳一般の象徴として持ち出された抽象的な言葉であった。<sup>57</sup> つまりそのような「自由」は、封建的な社会体制自体の否定ではなく、自由で自律した市民像を直接的に擁護するものではない。ケンパーは、詩人たちの語る「自由」について、「あまりにも思慮が浅く、自らの国の諸問題に関する判断においては煮え切らないものであった」と断じ、「感情や道徳的理想、そして行為への衝動」を愛国の言葉にぶつけただけとして、これを改革主義的愛国主義の文脈で語ることは妥当ではないとした。<sup>58</sup>

ただ、すでに述べてきたように、彼らの「自由」への叫びは、いかに抽象的であろうとも、道徳性と自由をそのまま重ねており、そのような表現自体、自由を至高とする価値意識を醸成し拡散する機能を持ったと考えられる。つまりそれは、自由な社会制度への要求という「改革

主義的な」方向に直接結びついていなくとも、専制や隷属状態への嫌悪感を触発し、「自由」それ自体への熱狂を呼び覚ます点で、自由主義的、改革主義的な方向性と全く無関係なわけではなく、やはりそのひとつの土壌として評価しうる。隷属状態の否定や、自己の感情の解放という形で、そこには市民的な自由の尊重につながる契機が確かに含まれていた。またトマス・アプトの言説は、ハイン同盟の詩人たちとは違って、市民の自由を不当に制限する政治体制を明確に批判している。「領主に、神ではなく人間であることを要求する」<sup>59</sup>と書いたシューバルトにおいても、抑圧的な体制からの自由と、祖国の自由主義的な改革を求める姿勢がはっきりと打ち出されている。

問題は、そのように彼らの愛国の言説が多かれ少なかれ自由主義的な土壌を確かに育むものでありながら、同時に、自由の理念そのものを空洞化するような構造を併存させていたことにあると思われる。それはただ単に、彼らの言葉が「思慮浅く」「感情的」であったということや、その自由主義があまりにも曖昧だったということではない。

アプトや詩人たちにおける「自由主義」の問題性を明らかにするために、ここで少し、「自由主義的な」原則のもとで政治的な共同体を構築しようとするときの一般的な問題系について考察してみたい。

一般に、理不尽な抑圧からの解放が求められ、自由への気運が高められるとき、ひとつの問いが避けがたく浮上することになる。それは、自由の理念と統一された全体性とをいったいどのように両立させるのか、という問題である。個々人の自由な意志や欲求を尊重しつつ、政治的な全体性をいかにして成り立たせるのか。この問題は、自由への気運の高まりとともに啓蒙時代においてすでに顕在化しており、とりわけルソーの社会思想に、両者の両立の困難をかいま見ることができる。<sup>60</sup>

同じ問題は、ドイツ語圏では20世紀初頭に、あらためて論争的な主題として浮かび上がっていた。この時代、外交的な緊張の高まりを背景に、経済的な繁栄を享受する人々が自己中心的で全体のことを考えない保身的なブルジョワとして批判され、自発的、能動的に政治的な責任を負う「市民」の創出が叫ばれた。それとともに自由意志の尊重を軸とする自由主義が批判的な検証の対象となり、政治的な共同体の強化がいかにして可能か、ということが問われたのである。市民の自覚的な政治参加を要請する風潮の中で、カール・シュミットのように、政治的な主体化を全体性への統合というかたちで進めようとする論者も影響力を強めてゆく。<sup>61</sup>

そのような全体主義的な契機に対抗し、政治的な主体化と自由な個人を両立させるためにはなにが必要なのか。これを考えるにあたって、ひとつの手がかりを与えてくれるのが、当時シュミットを批判した国法学者ヘルマン・ヘラーによる議論である。彼もまた私的な利益の追求に終始する「ブルジョワ」を否定したが、その一方で、シュミット思想が人々を市民ではなくむしろ奴隷化することを喝破し、全体性を能動的に創出する主体としての市民像を守ろうとした。注目に値するのは、その際彼が、全体性を流動的なものとして、また市民の自由意志を多様なものとしてとらえていたことである。つまり彼は、多様性を排除して不動の全体性を築こうとするのではなく、全体性を、個々人の自由意志の耐えざるぶつかり合いと折衝の中で生まれる可変的なものとして強調した。

政治的状态とは静態的なものではなく、日々新たに形成されるもの、つまり日々の人民投票である。構成員の多数性の中から政治的統一体が生まれ、自己主張して行くというダイ

ナミックな過程もまた政治である。<sup>62</sup>

政治的な全体性の強度を、内外の「敵」の排除に基づく超絶した国家権力の形成によって、または何らかのカリスマ的な象徴の力で高めようとするならば、個々人はこの全体性に自己放棄的な統合によって参与するしかなく、この参与がいかに「自由な」意思の結果であっても、そこには全体主義への道が開かれている。そのような道を遠ざけるためには、全体性は不動のものではなく可変的な、常に調整中のものであることが不可欠であり、この調整のための場所や手続きや仕組みが重要となるだろう。ヘラーは、そのような仕組みを探る営み、すなわち自由な意志の「数多性の中」で統一を模索する不断の営みにこそ、「政治的なもの」の中核があるとしたのだった。<sup>63</sup>

1770年代前後のパトリオティズムの言説に戻ろう。トマス・アプトは、自由主義的なものさえ守られるならば共和制ではなく君主制においても愛国は十分に可能であると論じていた。そこには確かに自由主義的な情熱が込められているのだが、その一方で、自由な個人が政治的な全体性に参与する回路は、自由の守護者として理想化された魅力的な君主への帰依、という一線に限られている。個々人の政治参加、すなわち共同体への主体的なコミットメントは、もっぱら自由という観念それ自体の持つ魅惑と、理想化された君主像の吸引力によってうながされており、そこには個々の主体の持つ多様な利害や欲求を調整する手続きが入り込む余地はない。つまり、確かに自由が重視されていても、自由な意思や欲求の「数多性」への意識が希薄で、ただ美化された祖国の像が、個々人を無媒介に全体性に組み込む形になっている。そのようなあり方は、愛国の詩人たちの言説はもとより、クロップシュトックやヘルダーによる文化ナショナリズムについても基本的に同じであろう。そこでは魅力的な言語や歴史、また民衆という観念が、愛すべきドイツの価値をなしており、そのような価値あるドイツの像に同一化することが、共同体への主体的な参与の内実となっている。その一方でこの愛国には、人々の自由意思の複数性をどのように調整するのか、という問題意識は希薄であった。

このようにアプトや詩人たちの愛国においては、自由への思いをすくいとった全体性が「祖国」に投影される一方で、そもそも自由を標榜するならば必要となるはずの、自由意思の多様性へのまなざしや、その中で全体をどのように導き出すのか、という観点が弱かった。啓蒙時代のパトリオティズムについて、自由主義的な側面を無効にしかねない契機を問題にするならば、そこに見られた排他的な側面や観念性や「思慮の浅さ」よりもむしろ、このような点に注目しなければならないように思われる。

##### 5) 愛国の言説における「自己滅却」への契機

近年のナショナリズム研究においても指摘されているように、自由主義的で普遍的平等の原理を持つ近代的な国民国家は、逆説的に同質性を厳密に要求し、排他的な力をうながすようなメカニズムを伴う。アンダーソンが指摘したように、近代的なナショナリズムの特徴は何よりも国民が均質で平等な共同体として想像されるということであり、<sup>64</sup> 国民の連帯の中に自らを没入させるその基本形態は、もろもろの差異を超えた「国民」へと個々人を抽象的に還元する思考回路と強く結びついている。つまり近代的なナショナリズムにおいては、祖国の平等な一員として皆が主体化するかたちをとることで、排他的な同質性を求める磁場もまた強められる

のである。<sup>65</sup> 個々人の多様性に対する意識が欠落した所では、そのような磁場の支配力に対して、歯止めとなる回路が失われていることになる。

18世紀のパトリオティズムの言説においても、人々に同質性を求め、規範的なものへの従順さを要求する言葉がしばしば見いだされる。ハイン同盟の詩人たちにおいてそれはとりわけ道徳性の奨励というかたちであらわれている。<sup>66</sup> すでに見たように、彼らは祖国の道徳性を手放しで賛美していたが、その道徳性とは具体的には、宗教的な敬虔さと並んで、とりわけジェンダー規範に関するものであった。すなわち、祖国の道徳性を讃える言葉にはたいてい理想とされる男性像や女性像が添えられ、「豪胆」で「高貴でその上善良な」男性像や、「天使のような」女性像が、<sup>67</sup> それ自体男性性や女性性の規範的なモデルとして掲げられている。近代的なナショナリズムにおいて性別役割の規範が果たした役割については、すでにジョージ・モッセが『ナショナリズムとセクシュアリティ』の中で詳細に論じている。<sup>68</sup> 国民意識の形成過程でジェンダー規範の強化がうながされたことを跡づけたこの研究は、自由で平等な国民たちの統合において、性規範やジェンダー規範が「国民」の前提をなす同質性を担保するためのいわば「鋳型」として機能したことを示している。ハイン同盟の詩人たちの言説にも、そうした「鋳型」としてのジェンダー規範の機能が、すでに見落としがたく明らかになっている。クロップシュトックは1770年に『祖国の歌』で模範的な愛国の少女像を次のように歌った。

私はドイツの少女  
瞳は青く、まなざしは優しい。  
私には心がある、  
気高く誇り高く善良な。  
(...)  
私はドイツの少女  
あの人を見ると青い瞳に怒りが走る  
大嫌いなんです、  
自分の祖国を見誤る人は。<sup>69</sup>

この詩は、ハイン同盟の若い詩人たちに愛されてさまざまな変奏が生まれた。シューバルトもこの詩を受けて、一連ごとに「ドイツの少女」の対となる「やんごとなきお嬢様」の描写を挟み込んだ詩を書いている。「やんごとなきお嬢様」は「ドイツの少女」とはちがってドイツに興味はなく、フランスかぶれで高慢でおセンチな女性として描かれている。<sup>70</sup> 「女性」としての良い例と悪い例が、愛国心の有無にそのまま重ねられているのである。

このように愛国の言説の高まりは、「祖国」に帰属する人々の同質性を担保するような規範的な女性像や男性像の強化をともなっていた。排外主義的な傾向に歯止めをかけていた啓蒙主義的な公平さや客観性も、そうした規範化に際してはあまり対抗的に機能していないように思われる。異なる国や文化については多様性を許容する文化相対主義的な視点を持ったヘルダーも、文化の内部の性別役割に関しては規範的な観念を維持していた。

男女の美德についての言葉は、あくまでも日常的なふるまい方を枠づける規範である。しかしパトリオティズムの言説の行き着く先には、「祖国のための死」という究極の自己滅却があった。アプトが人々の間に喚起したいと願った「気高い祖国愛」とは、「祖国のための死」とい

うその論文名が明確に示すように、最終的には自らの命を捧げる覚悟を要請している。彼の論説の中では、道徳的な祖国愛の条件として「自由」が掲げられる一方で、共同体への個人の完全な自己放棄が「祖国愛」の名の下に奨励されている。

アプトのみではなく、「祖国のための死」は愛国的な詩人たちにとっても心惹かれる題材であった。クロップシュトックは、敬虔主義における神への熱狂的な自己放棄を受け継ぎつつ、神聖な愛の対象として位置づけられた祖国への自己放棄をうたっている。<sup>71</sup> 若い詩人たちも英雄的な死という想念に陶醉し、とりわけシュトルベルクは、祖国を熱狂的な自己犠牲の対象にした。『我が祖国。クロップシュトックに寄せて』（1774）の中で、彼は祖国を歌う自身の姿を雄々しい孤高の英雄として描き出し、「我はドイツ人なり！」と宣言する。そしてこの「聖なる国」へ「身を捧げる」ことを夢想しつつ、「名誉の死を遂げる」自分の姿を甘美な陶醉とともに想起している。

もう響いてくる、武者のひづめの音が  
戦のラッパの音が。もうまぶたに浮かぶ  
血に染まった土に埋もれながら  
祖国のために 名誉の死を遂げる我の姿が。<sup>72</sup>

## おわりに

アプトの論文にしろ、詩人たちによる作品にしろ、この時代のパトリオティズムの言説においてしばしば特徴的だったのは、自由への希求と集団への自己犠牲という観念が、ともに過度なまでに肥大化しながら両立していることであった。つまり自由と集団的なものへの自己滅却という、一見相反する契機が何のためらいもなく共存していたのである。<sup>73</sup> その背景には、自由な個人と集団的なものをつなぐ線が、多様な個のありようを調整する道を鍛えることによってではなく、もっぱら、理想化されたドイツ像や「自由」という観念そのものの魅惑によって作り出されていた、ということがあるだろう。つまりそこでは、共同体内部の同質性を強化させ、個人の自己滅却をうながそうとする力に対抗しうるような思考回路、すなわち、「数多性」を前提とし、その調整を探るような思考回路が弱かったのである。アプトや愛国の詩人たちにおいては、集団的なもの自体に自由や道徳性の理想が投影されており、それによって自己放棄そのものの「自由」が担保されるかたちになっていた。結果的に彼らの言説は、自由主義的な欲求の受け皿になると同時に、全体性のために自己滅却する「自己犠牲」の肯定が顕著な、きわめて両義的なものとなっている。

（本稿は、科学研究費〔平成27年度、基盤研究C、研究課題名「18世紀後期の劇作品にみる市民家族像の政治性についての研究」、研究代表者 菅利恵、研究課題番号15K02412〕による研究成果の一部である。）

## 註

- 1 Friedrich Meinecke: *Weltbürgertum und Nationalstaat. Studien zur Genesis des deutschen Nationalstaates*. Hrsg. und eingeleitet von Hans Herzfeld. München 1969.
- 2 Hans Kohn: *The Idea of Nationalism. A Study in Its Origins and Background*. New York 1949, S. 392 ff.
- 3 Holger Böning: “Das Volk im Patriotismus der deutschen Aufklärung”. In: *Patriotismus und Nationsbildung am Ende des Heiligen Römischen Reiches*. Hrsg. von Otto Dann, Miroslav Hroch und Johannes Koll. Köln 2003, S. 63-98; Christoph Prignitz: *Vaterlandsliebe und Freiheit. Deutscher Patriotismus von 1750 bis 1850*. Wiesbaden 1981, S. 35 ff.
- 4 Böning 2003, S. 64. 他に啓蒙時代のパトリオティズムの自由主義的な特徴に注目した研究として、Jörg Echternkamp: *Der Aufstieg des deutschen Nationalismus (1770-1840)*. Frankfurt a. M. u. New York 1998, S. 42-162; Michaela Wirtz: *Patriotismus und Weltbürgertum. Eine begriffsgeschichtliche Studie zur deutsch-jüdischen Literatur 1750-1850*. Tübingen 2006, S. 7-30 などがある。
- 5 文学研究でも18世紀の愛国主義と19世紀のナショナリズムを本質的に異なるものとして強調する風潮が強い。例えば：Wolfgang Wittkowski: *Nationalismus oder für eine bessere Gesellschaft? Goethe, Schiller, Kleist*. Oldenburg 1995.
- 6 Otto Dann: *Nation und Nationalismus in Deutschland 1770-1990*. Dritte, erweiterte und überarbeitete Auflage. München 1996, S. 54.
- 7 Hans-Martin Blitz: *Aus Liebe zum Vaterland: Die deutsche Nation im 18. Jahrhundert*. Hamburg 2000, S. 347.
- 8 Blitz 2000; Hans Peter Hermann, Martin Blitz und Susanne Moßmann (Hrsg.): *Machtsphantasie Deutschland. Nationalismus, Männlichkeit und Fremdenhaß im Vaterlandsdiskurs deutscher Schriftsteller des 18. Jahrhunderts*. Frankfurt a. M. 1997.
- 9 大澤真幸『ナショナリズムの由来』、講談社、2007年、362-387頁。
- 10 Riccarda Henkel: “Sozietätsgeschichte und Zeitschrift. Der Nutzen von gelehrten Journalen zur Sozietätsforschung am Beispiel der Jenaischen gelehrten (sic) Zeitungen”. In: Claire Gantet und Flemming Schock (Hrsg.): *Ephemeriden Zeitschriften, Journalismus und gelehrte Kommunikation im 18. Jahrhundert*. Festschrift für Thomas Habel. Bremen 2014, S. 89-112, hier S. 90-93.
- 11 出版文化全般の18世紀における発展についてはすでに豊富な研究文献がある。一例として：Michael North: *Genuss und Glück des Lebens: Kulturkonsum im Zeitalter der Aufklärung*. Köln; Weimar 2003.
- 12 Vgl. Jürgen Habermas: *Strukturwandel der Öffentlichkeit. Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*. Mit einem Vorwort zur Neuauflage 1990. Frankfurt a. M. 1990.
- 13 Echternkamp 1998, S. 51.
- 14 Vgl. Wolfgang Martens: *Die Botschaft der Tugend. Die Aufklärung im Spiegel der deutschen Moralischen Wochenschriften*. Stuttgart 1968, S. 325.
- 15 Vgl. Echternkamp 1998, S. 54.
- 16 後で注目するポイエの雑誌も、基本的には文芸誌であるが、同時代のアクチュアルなテーマを多く織り込んでいる。
- 17 当時の政治的言説の展開については、Echternkamp 1998, S. 42-162; Rudolf Vierhaus: *Deutschland im 18. Jahrhundert. Politische Verfassung, soziales Gefüge, geistige Bewegungen*. Göttingen 1987, S. 96-109などを参照。
- 18 Vgl. Michael Rohrwasser: “Lessing, Gleim und nationale Diskurs”. In: *Lenz-Jahrbuch, Sturm und Drang Studien* 7 (1997), S. 137-162.
- 19 アプトの思想については以下を参照した。Hans Erich Bödeker: “Thomas Abbt: Patriot, Bürger und bürgerliches Bewußtsein”. In: Rudolf Vierhaus (Hrsg.): *Bürger und Bürgerlichkeit im Zeitalter der Aufklärung*. Heidelberg 1981, S. 221-254.
- 20 Thoms Abbt: “Vom Tod für das Vaterland”. Neue verbesserte Aufl. In: Ders.: *Vermischte Werke. zweiter Theil welcher 1) vom Tode fürs Vaterland 2) Fragment der portugiesischen Geschichte enthält*. Berlin und Stettin

- 1781.
- 21 Vgl. Bödeker 1981, S. 233.
- 22 Abbt 1781, S. 17.
- 23 Abbt 1781, S. 12.
- 24 同様の傾向は、アプトのみではなく 18 世紀後期における愛国の言説に広く見られた。以下を参照。  
Echternkamp 1998, S. 58 f.
- 25 ゲッティゲン・ハイン同盟の設立経緯や活動内容等は、以下に詳しい。Annelen Kranefuss: “Klopstock und der Göttinger Hain”. In: *Sturm und Drang*. Hrsg. von Walter Hinck. Frankfurt a. M. 1989, S. 134-162; Hans-Georg Kemper: *Deutsche Lyrik der frühen Neuzeit. Bd.6/III, Sturm und Drang: Göttinger Hain und Grenzgänger*. Tübingen 2002.
- 26 Vgl. Blitz 2000, S. 375-380; Kemper 2002, S. 148.-166.
- 27 Johann Martin Miller: “Der Patriot an sein Vaterland”. In: *Deutsche National-Litteratur*. Historisch kritische Ausgabe. Hrsg. von Joseph Kürschner. Bd. 50, 1. Abteilung. *Der Göttinger Dichterbund. 2. Teil*. Hrsg. von August Sauer. Stuttgart o. J. (Rep. Tokyo 1974), S. 205.
- 28 Johann Martin Miller: “Deutsches Lied”. In: *Der Göttinger Dichterbund. 2. Teil*, a. a. O., S. 200.
- 29 Vgl. Kemper 2002, S. 152 f.
- 30 Johann Martin Miller: “Der deutsche Jüngling, an sich selbst”. In: *Der Göttinger Dichterbund. 2. Teil*, a. a. O., S. 229 f.
- 31 Johann Heinrich Voß: “Deutschland. An Friedrich Leopold Graf zu Stolberg”. In: *Deutsche National-Litteratur*. Historisch kritische Ausgabe. Hrsg. von Joseph Kürschner. 49. Bd. *Der Göttinger Dichterbund. 1. Teil*. Hrsg. von August Sauer. Stuttgart o. J. (Rep. Tokyo 1974), S. 178. 同じ詩人による詩『奴隷』（1776）も参照。“Der Sklave”. In: Ebd., S. 241 f.
- 32 Friedrich Leopold Graf zu Stolberg: “Die Freiheit”. In: *Deutsche National-Litteratur*. Historisch kritische Ausgabe. Hrsg. von Joseph Kürschner. 50. Bd, 2. Abteilung. *Göttinger Dichterbund III*. Hrsg. von August Sauer. Stuttgart o. J. (Rep. Tokyo 1974), S. 33.
- 33 Ebd., S. 35.
- 34 “Mein Vaterlandslied”. In: *Deutsche National-Litteratur*. Historisch kritische Ausgabe. Hrsg. von Joseph Kürschner. Bd. 47. *Klopstocks Werke. 3. Teil. Oden, Epigramme und geistliche Lieder*. Hrsg. von R. Hamel. Berlin und Stuttgart o. J. (Rep. Tokyo 1974), S. 149.
- 35 Blitz 2000, S. 373 f.
- 36 Friedrich Gottlieb Klopstock: *Deutsche Gelehrtenrepublik. Ihre Einrichtung. Ihre Gesetze. Geschichte des letzten Landtags. Auf Befehl der Aldermänner durch Salogast und Wlemar*. Hrsg. von Rose-Maria Hurlebusch. (*Werke und Briefe*. Historisch-kritische Ausgabe. Begründet von Adolf Beck, Karl Ludwig Schneider und Hermann Tiemann. Hrsg. von Horst Gronemeyer, Abt. Werke; 7) Berlin 1975.
- 37 Kemper 2002, S. 147. ただし彼の試みは全く影響力を持たないまま終わった。
- 38 Johann Gottfried von Herder: “Alte Volkslieder”. In: *Werke in zehn Bänden. Bd. III*. Hrsg. von Ulrich Geier. Frankfurt a. M. 1990, S. 20. Vgl. Blitz 2000, S. 359.
- 39 Johann Gottfried von Herder: “Alte Volkslieder”, a. a. O., S. 19
- 40 Ebd.
- 41 Vgl. Bödeker 1981, S. 245.
- 42 同様の指摘として: Kemper 2002, S. 166. ただシケンパーは、「観念的」ということをそのまま「非政治的」ととらえている。
- 43 Hans Peter Hermann: “>Ich bin fürs Vaterland zu sterben auch bereit.< Patriotismus oder Nationalismus im 18. Jahrhundert? Lesenotizen zu den deutschen Arminiusdramen 1740-1808”. In: *Gesellige Vernunft. Zur Kultur der literarischen Aufklärung*. Festschrift für Wolfram Mauser zum 65. Geburtstag. Hrsg. von Ortrud Gutjahr, Wilhelm Kühlmann, Wolf Wucherpennig, Würzburg 1993, S. 119-144; Blitz 2000, S. 345-392.

- 44 フランスやフランス文化を偏重する風潮に対する批判は、クロップシュトックとハイン同盟の詩には頻繁に見られる。一例として：Johann Heinrich Voss: “Deutschland. An Friedrich Leopold Graf zu Stolberg.” In: A. a. O. この点については以下を参照。Blitz 2000, S. 383-385.
- 45 Klopstock: “Vaterlandslied.” In: *Klopstocks Werke*. 3, a. a. O., S. 149.
- 46 Klopstock: “Kennt euch selbst.” In: *Klopstocks Werke*. 3, a. a. O., S. 181.
- 47 C. F. D. Schubart's, *des Patrioten, gesammelte Schriften und Schicksale. Achter Band*. Stuttgart 1840 (Reprint: *Gesammelte Schriften und Schicksale. VII/VIII*. Hildesheim; Zürich; New York 2000), S. 10.
- 48 C. F. D. Schubart's, *des Patrioten, gesammelte Schriften und Schicksale. Siebenter Band*. Stuttgart 1840 (Reprint: *Gesammelte Schriften und Schicksale. VII/VIII*. Hildesheim; Zürich; New York 2000), S. 191.
- 49 例えば当時の言説の中では、暴力的で排他的なものを打ち出す愛国表現を「下等」とし、あくまでも人間愛に基づいた道徳性としての愛国を「高貴」として両者を区別する試みもあった。Wirtz 2006, S. 15 f.
- 50 G.A Halem: “Hat der Deutsche Ursache auf seine Nazion stolz zu sein?” In: *Neues Deutsches Museum. Dritter Band. Julius bis Dezember 1790*. Hrsg. von Heinrich Christian Boie. Leipzig 1790, S. 1204-1220.
- 51 Ebd. S. 1205.
- 52 Ebd. S. 1205 f.
- 53 Ebd. S. 1206.
- 54 同様の点はヘルダーについても指摘されている。Vgl. Prignitz 1981, S. 16.
- 55 Vgl. Böning 2003, S. 64 f.
- 56 Kemper 2002, S. 135-159.
- 57 Kemper 2002, S. 156.
- 58 Kemper 2002, S. 165 f.
- 59 C. F. D. Schubart's, *des Patrioten, gesammelte Schriften und Schicksale. Achter Band*. A. a. O., S. 33.
- 60 『社会契約論』などの社会思想には、個人の自由意志という理念と全体性への自己放棄ということがともに突き詰められたかたちで同居しており、その点がこれまでに再三「ルソー問題」として取り沙汰されてきた。(E. カッシーラー (生松敬三訳) 『ジャン・ジャック・ルソー問題』、みすず書房、1974/2015年、19-21頁。)
- 61 古賀敬太『ヴァイマル自由主義の悲劇：岐路に立つ国法学者たち』、風行社、1996年。
- 62 H. Heller: “Politische Demokratie und soziale Homogenität”. In: *Gesammelte Schriften*, 2. Band, S. 424 f.
- 63 以下を参照：古賀敬太『シュミット・ルネッサンス：カール・シュミットの概念的思考に即して』、風行社、2007年、17頁。
- 64 ベネディクト・アンダーソン (白石隆, 白石さや訳) 『想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』、書籍工房早山、1997年、26頁。
- 65 大澤前掲書、2007年、89頁。
- 66 Vgl. Kemper 2002, S. 159 f; Blitz 2000, S. 389-392.
- 67 L. H. Chr. Hölty: “Vaterlandslied”. In: *Göttinger Dichterbund. 2. Teil*, a. a. O., S. 89.
- 68 ジョージ・モッセ (佐藤卓己, 佐藤八寿子訳) 『ナショナリズムとセクシュアリティ。市民道徳とナチズム』、柏書房、1996年。
- 69 Friedrich Gottlieb Klopstock: “Vaterlandslied”. In: *Klopstocks Werke. 3. Teil*, a. a. O., S. 149 f.
- 70 Christian Friedrich Daniel Schubart: “Das teutsche Mädchen”. In: *Deutsche Lyrik vom Barock bis zur Gegenwart*. Hrsg. von Gerhard Hay und Sibylle von Steindorff. München 2007, S. 75 f.
- 71 Vgl. Blitz 2000, S. 371.
- 72 Friedrich Leopold Graf zu Stolberg: “Mein Vaterland. An Klopstock”. In: *Der Göttinger Dichterbund. 3. Teil*, a. a. O., S. 55.
- 73 共同体の内部における同質性を要求し、規範的なものへの従順さを説くという点は、パトリオティズムとコスモポリタニズムとの最も大きな違いでもあるだろう。当時両者には共通点も多かったが、コスモポリタニズムにおいては、自由意志の尊重ということが特定の共同体への帰属よりも優先される。二つの潮流の関係性についてはいずれ稿をあらためて論じたい。